

慢性腎臓病

慢性腎臓病

(Chronic Kidney Disease:CKD)の対策

CKDとは

最近、マスコミでも扱われる機会の多くなったCKDとは、検診や人間ドックでの検尿異常(尿蛋白や尿潜血)、血清クレアチニンの上昇などが3ヶ月以上続く状態です。特に血清クレアチニンの値によって腎機能(糸球体濾過値、正常では90以上)を推定し、その値が60以下(CKDステージ3以上)の場合がCKD患者とされています。

CKDへの対策

CKDは病期によってステージ1～5に分けられ、早期(ステージ1～2)には症状はほとんどありませんが、症状が出現する時期(ステージ4～5)になると腎機能を回復することが難しいという問題があります。CKDを早期に発見してステージを進行させないことが重要で、腎機能が既に低下した場合には、食事療法や薬物療法によって残された腎機能を長持ちさせることが大切です。

CKD対策の意義

現在、日本では約28万人の方が透析を受けており、毎年約1万人ずつ患者さんが増加。その原疾患としては1998年以降、糖尿病性腎症が最も多くなっています。また、CKDを持つ人は心筋梗塞、心不全および脳卒中といった心血管疾患の合併症が多くなるということが解ってきています。CKD対策を行うことは、すなわち透析となる患者さんを減らし、命を脅かす病気も減らすということになるわけです。検診で腎臓の異常を指摘された場合には、早期にかかりつけ医および腎臓専門医の受診をおすすめします。

済生会八幡総合病院

腎センター 部長

医学博士 安永 親生